

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【タイトル】

東方特殊部隊

【作者名】

ルック

【あらすじ】

登場人物 東方キャラ等 TAC小隊 デイビット・フェスター
32歳TAC小隊の隊長 仲間を大切にできる心が強く、あらゆる状況
対応出来る、戦闘能力を持っている、隊員からの信頼も暑い ラス
ティール・ウッズ 34歳 TAC小隊の突撃兵 高い攻撃力と防御
力を持つ並みの攻撃では、歯が立たないだろう しかし装甲が厚く重
武装のため動きは余り早くない フォレスト・サンダース 28歳
TAC小隊の狙撃兵 狙撃の際には、驚くほどの命中率と集中力を見
せる、一人での隠密行動や味方の援護などを得意とする アフター・
グライムス 28歳 TAC小隊の工員 爆発物の扱いに長け、少
量の爆弾で大きな建造物を破壊することも造作なく、完全に破壊でき
る 常にと行って良いほど、タバコを吸っている フート・マツケイ
ン 24歳 TAC小隊の衛生兵 小隊の中でも一番若いがありと
あらゆる医学に精通している 医療機器が揃っていれば彼に治せな
い怪我は無いだろう リーストライカー 攻撃車両 TAC小隊と一
緒に幻想入りしてしまった装甲車 強力な機関砲が装備され、装甲も
頑丈な TAC小隊の移動攻撃車両 物語 アメリカの精鋭揃い

の特殊部隊 TAC小隊別名tacticalscaptra（戦術
攻略小隊）は、任務の最中に消息を経った、どこに消えたのか分から
ない部隊の消息、それもそのはず彼らが消息を経った後たどり着いた
場所は・・・この世には存在しない場所：そう幻想郷だった：そし
てその幻想郷もある問題をかかえていた：幻想入りしてしまった特
殊部隊は無事にもとの世界に戻るのか？

注意このお話はフィクションです、実際の人物組織とは関係ありま
せん

第1話

激しい雨が降っている、そんな中で目が覚めた。

デイビット「ここは？ 一体？」

ここが何処なのか、何故ここに居るのか、そこだけがどうしても思
い出せない

デイビット「俺は確か・・・あの時、任務で敵の基地に向かっていた、
その為に森を歩いていたら・・・急に目の前が真っ白になって・・・駄目
だ！そこからが思い出せない・・・そうだ・・・俺の仲間！もしかした
ら、この近くに居るかもしれないな・・・よし・・・探しに行こう・・・装備
は？ちゃんとあるな、行こう！」

そう言ってデイビットは歩き出した、目を覚ました場所が深い森の
中だったため

まだ昼間なのだろうが、背の高い木が日の光を遮ってるため、とて
も薄暗い。

デイビット「この森は、薄暗いな」

そんなこと言いながら歩いていて、あれから結構な時間歩いたのだ
ろう・・・気がつけば、雨が止んでいる。

デイビット「ん？雨が止んだな、少し休憩しよう」

そう言ってデイビットは木の影にこしを下ろした、その休憩の際に
もデイビットは色々なことを考えていた、ここが一体何処なのか？

隊員は全員無事だろうか？そもそもこの近くに居るのか？そんな不

安がデイビットを悩ませていた。

デイビット「考えていても始まらない、さて、そろそろ出発するか」

デイビットが立ち上がった次の瞬間、辺りが一瞬して、闇に包まれた、突然の出来事にデイビットは言葉を漏らした

デイビット「一体？これはどうなってるんだ！」

混乱するデイビットのすぐ側の木の影にこの現象の張本人が立っていた

???「フフフ…」

自分のすぐ側の木の影から笑い声が聞こえたので、素早く振り返ると、一人の少女が立っていた。その少女は黒い服を着ていて、両手を大きく広げてにこにこしている。

混乱している頭の中を整理して、少女に話しかけてみた。

デイビット「お嬢ちゃん、一体こんなところで何してるんだい？」

少女の口からデイビットが「いや…人が人との会話で予想出来ない言葉を発した。」

???「あなたは食べても良い人？良い人なら私、お腹空いてるから食べたい」

デイビット「!？」

生きてる間にこんな質問をされるとは、思ってたなかった…だが…このままおとなしく喰われる気もない

デイビット「待った！君はお腹が空いてるのか？」

???「そうよ、だからあなたを食べるの」

デイビット「(心の声)お腹が空いてるのなら…満たしてやれば喰われずに済むじゃなか？」

そう思ったデイビットはリュックの中から、軍用のインスタントカレー、粉末ジュース等を出して、こう言った

デイビット「俺なんかより、美味しいものが一杯あるぞ？…なんなら今から作ってやるから

飯にするか？」

デイビットがそう言う、少女は目を輝かせて。

???「本当に！やった〜」

と、大喜びだ。どれ程腹が減っていたのだろう？そんなことを考えていたら、辺りを包んでいた闇が少女が喜んだと同時に消えた、だが闇が消えても外はすでに日が沈んでいた

デイビット「今日はここで野宿だな」

森の中で焚き火をして、夕食を取ることにした少女には、軍用のインスタントカレーと粉末ジュースを作って食べさせた、とても満足そうだ。

二人で夕食を食べながら、話している内に色々分かってきた。

まず、少女の名前はルーミア……さらに、先程一瞬にして、辺りを闇に包んだのは、ルーミアの能力だと言う、なによりも驚いたのは自分のいる場所が、幻想郷というところらしい、この幻想郷では人間と妖怪と別れているらしい、ルーミアは妖怪のようだ、なかにはとても恐ろしい能力を持った者、能力を持っているが、人間と言う奴も居るそうだし、そしてこの幻想郷は現実世界で幻想になったものが来る場所らしい、そしてこの幻想郷は俺たちの住んでいた、現実世界と隔離されてると言うこと、どうすれば、この幻想郷から現実世界に戻るのか？そして仲間達は無事なのか？何処に居るのか？そんな事を考えていたら、ルーミアが。

ルーミア「人里につれてあげようか？」

デイビット「なんだ？その人里ってのは」

ルーミア「人里って言うのはね……あなた達みたいなの、外の世界から来た人間が多く暮らしてる場所だよ？」

人里……そこに行けば、何か有力な情報が手に入るかもしれない。

デイビット「じゃあ明日そこに連れてってくれ」

ルーミア「分かった……ふぁ〜眠い……」

確かに今日は疲れた、早めに寝て明日ルーミアと人里に行くのに備えないといけないな

二人で夕食の後片づけをして、今日はもう寝る事にした

第二話に続く